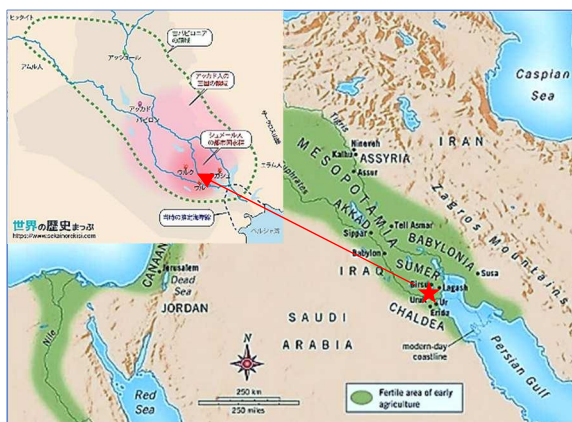


P.1 古代文明発祥の地 メソポタミア

✓ **メソポタミア**はギリシア語で「川の間」を意味し、チグリス川とユーフラテス川の二つの大河の流域の狭間で栄えた土地で、およそ紀元前9千年に遡る歴史を持つ、**古代文明発祥の地**の一つである。

メソポタミアでは、**土器・陶器**が発達した北メソポタミアの**ハラフ文化**や**ウバイド文化**から始まり、**都市国家**として発展した**シュメール**、**アッシリア**、**バビロニア**など複数の王朝が繁栄し、その過程で多くの**人類史上、最古の重要な文明**が生まれた。

北メソポタミアでは、**天水農業**が可能だったため、紀元前1万年頃から集落が生まれたのに対し、南メソポタミアは**乾燥地帯**であったため、人々の定着はより遅い紀元前5500年頃に行われ、**農耕**もその頃始まったとされる。



✓ 地理的に恵まれた土地

チグリス川とユーフラテス川が合流するペルシア湾の河口付近は平野の為、川の氾濫や潮の干満の影響を受けやすい湿地帯で、冬と夏の気温差が激しく、春になると雪解け水で両河川は頻繁に洪水になることが要因となり、農業に適した**沖積土**がもたらされた。そして、**温暖な地中海性気候**と**肥沃な大地**によって植物も動物も人間も生活する**土壌**があったため、**文明が発祥し、栄えることができた**。

✓ 肥沃な三日月地帯

ペルシア湾から、北へ弧を描く様にチグリス河とユーフラテス河流域のメソポタミア、シリアから東地中海沿岸を南下してエジプトのナイル川北部を含めたこの半円形の地域を**肥沃な三日月地帯**（上地図の緑部分）と言っている。北部は山岳地帯、南部は砂漠ですが、地中海性気候により温暖かつ湿潤であったため、自然に恵まれ、早くから農業と牧畜が始まった。紀元前9千年頃までには定住農業が始まり、村を構築、灌漑農業も始まり、農業の基礎を形成する8種の植物の内の6種（二粒小麦、一粒小麦、大麦、レンズ豆、エンドウ豆、ひよこ豆、ソラマメ科のビターベッチ、亜麻）がこの地域で栽培された。

✓ 世界最古の楔形文字の発明

メソポタミアの**ウルク遺跡**★で発掘された紀元前3200年頃の粘土板には、**楔形文字**（右図）の最古の原型で、原シュメール文字とも言われている「**ウルク古拙文字**」が見ついている。この粘土板には、数値記号と共に羊などの動物、人間の手足や頭、古穀物等の**象形文字**が書かれており、数量の記録であったとされている。**このウルク古拙文字**が後のシュメールで簡易化されて**楔形文字**となり、メソポタミア全土に広がった。



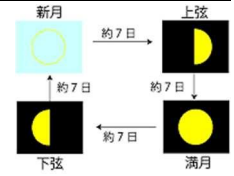
【参考】 ウルク古拙文字

メソポタミアでは、紀元前8000年頃から文字が誕生するまで、財産の出納管理の為に使われた球形、円錐形など様々な形（有模様、無模様）の**トークン**と言う粘土で作られた1cm位の大きさの計算具があった。そのトークンの中に入れ保管する為に、泥粘土の球「**ブッラ**」（写真左側の球）が紀元前3500年頃に誕生した。ブッラは不正が無いようトークンを密閉できる封筒の様な役目を担っていた。また、ブッラに入れたトークンの内容が分かるように、ブッラに押捺をし、管理した。時代が経つにつれ、改良され出来たのが、**ウルク古拙文字**（絵文字であり、後の**楔形文字**の原型である世界最古の文字、右写真）である。



P.2 **☑** 暦や天文学、占星術の発展

メソポタミア文明の基礎を築いた民族シュメール人のシュメール文明では六十進法が採用されており、楔形文字には1~59に対応する数字があった。また、天文学も発達しており、月30日、年360日とする月の満ち欠けの周期を基にした暦（暦法）である太陰暦を使用し、現在も世界中で使われている七曜制（月の満ち欠けの変化―新月→上弦→満月→下弦→晦（新月）と変化していく周期がほぼ7日である―をもとに1週を7日とする単位）も生み出された。こうした暦法や天文学のベースとなったのは、太陽や月、星の動きによって天候や未来を予知する占星術とされている。



☑ 世界最古の法典、法治国家

シュメール文明では、シュメール語の楔形文字で書かれた世界最古の法典「ウル・ナンム法典」が見つかっている。この法典には、殺人・窃盗・傷害・姦淫・離婚・農地の荒廃などについて損害賠償に重点を置いた刑罰が示されており、シュメール文明は世界最古の法治国家だった。さらに、その後のバビロニアでは紀元前1760年頃にあの有名な「ハンムラビ法典」が發布されている。

☑ 現存する世界最古の「ウル・ナンム法典」

ウル第3王朝を作ったウル・ナンム王と息子で2代目王シュルギの治世である紀元前2115～紀元前1050年頃に作られた法典です。シュメール語の楔形文字で書かれた35条からなる法典で、殺人・窃盗・傷害・姦淫・離婚・農地の荒廃などについての損害賠償に重点を置いた刑罰で、損害賠償は銀によって支払われた。この法典は、現在イスタンブール考古学博物館にて保管されている。

☑ 目には目を！の「ハンムラビ法典」

“目には目を、歯には歯を”の同害復讐法で有名な「ハンムラビ法典」(282条)は、紀元前1760年頃にバビロニアで發布された法典である。“目には目を…”は誰にでも同等に適用されるわけではなかった。不当な処分にならないように、また、女性でも奴隷でも一定の権利があり、弱者が強者に虐げられることから守られるなどが、成文化された初めての法令で、現在の刑罰法の起源とも言われている。高さ2.25mの石碑には、条項がアッカド語の楔形文字で記してあり、市民が見える所に置かれていた。



☑ 古代メソポタミアの公用語 アッカド語

最も古いセム語系のアッカド語は、紀元前2500年頃から使われた。紀元前1000年頃に北の①アッシリア語と南の②バビロニア語の二つに分かれ、それぞれ独自に発達した。①アッシリア語は新アッシリア帝国が紀元前609年に滅亡するまで、②バビロニア語は古典語の統一的な文法が使用された標準文語としてセレウコス朝の時代紀元前100年頃まで、国際的に文学や書簡の表記に使われた。

しかし、紀元前8世紀頃からアラム語の普及に伴い使われなくなった（表記は、シュメール語の楔形文字を使用した）。

アッカド語 { ①アッシリア語 → アラム語 (楔形文字)
②バビロニア語

P.3 ▶土器・陶器が発達した北メソポタミアの<ハラフ文化>：紀元前 6,000～紀元前 5,400 年頃

紀元前 6,000 年～紀元前 5,400 年頃に北東シリアのテル・ハラフを中心に北メソポタミア、シリア、アナトリア、現トルコとシリアの国境周辺の「肥沃な三日月地帯」北部で始まり広がった文化です（有土器新石器時代）。この時代では、農耕と牧畜が行われていたが、灌漑農業は行われておらず、雨水に頼った農業だった。銅は知られていたが加工技術は無く、道具には石等が使われた。この文化はその後、紀元前 5,000 年頃に<ウバイド文化>へ継承され消滅した。

▶新石器時代の南メソポタミア最古の<ウバイド文化>：紀元前 5900～4300 年頃

<ウバイド文化>は、紀元前 5900 年～4300 年頃にテル・エル・ウバイド遺跡（現イラクのジーカール県）に見られる。この文化は段々と南から中部、北部へと広がり、途中<ハラフ文化>も継承した。北のトロス山脈やザグロス山脈からやって来た人たちがこの地で集落を造ったと言われている。水路を建設して灌漑農業を始めたことで、農業が大きく発達し、主に小麦、大麦、亜麻、ナツメヤシが栽培された。畜産は主に牛と豚だった。また、海や川に近い地域では、漁業も重要な役割を占めていた。後期にはメソポタミアより広い、南東アナトリアや東地中海まで<ウバイド文化>が拡散した。

メソポタミアでは、木材や石材や鉱山が無かったので、材料や原材料を外部から調達するため、外の土地に商売目的の植民地も作った。神殿も初めて作られ、代表的なものが、トルコ南部マラティア県内の「アルスラーンテペ」、イラクのエリドゥ、ウルク、テペガヴラなどの遺丘から見つかっている。

「車輪」が発明されたのもこの時期で、元はろくろから発達したものだ。<ウバイド文化>も、紀元前 4000 年ごろに<ウルク文化>へと引き継がれ、紀元前 3800 年頃の急な気候変化の乾燥化により、終焉した。

▶集落から都市国家へ <ウルク文化>：紀元前 4000～3100 年頃

紀元前 4000 年～3100 年頃に、メソポタミア最南部ユーフラテス河畔の東側にできたシュメール人の都市ウルク（★現イラクのムサンナー県ワルカ）から広まった文明で、約 1000 年も続いた。

広範囲の灌漑農業の発達に伴い多種の穀物が栽培種化され、人口が増加し、支配階級が現れたことで集落から都市国家が生まれてきました。

先述した、歴史上初めて「ウルク古拙文字」も誕生した。それと共に粘土板も使われるようになった。長距離貿易が発達し、メソポタミア内には密接した貿易ネットワークが形成されていた。ウルク文化はメソポタミア全土だけでなく、アナトリアや地中海まで普及した。

▶最古の都市文明 メソポタミア文明を築いた<シュメール人>：紀元前 4000～2334 年頃

シュメール人は、紀元前 4000 年頃に南メソポタミアに定住し、メソポタミアの南端で都市文明を築き繁栄した。<ウルク文化>にて花開いたシュメールは、大洪水の後にキシユ、ウル、ウルク、ラガシュなどの都市にて新興シュメール都市国家が成立し、王朝時代が築かれた。

- ・年代：紀元前 4000～2334 年頃
- ・民族：シュメール人
謎の民族で出自が解っていない世界最古の民族の一つで、中央アジア方面から移住したモンゴロイド系と言う説もあります。
- ・言語：シュメール語（非セム語系の独立した言語）。
- ・宗教：宇宙や地上の自然の力に神々を見出し擬人化した多神教、天空神で最高神であるアンを崇拝。彼らはジググラトと呼ぶ山に見せかけた高い神殿に神々を祀った。ジググラトは最初一段高い単純なワンルームの形状だったが、徐々に多層化し、後期王朝時代には 2～7 段で最下層は食糧倉庫、中層は学校と神殿、上層が展望台など数層に分かれた、高層のピラミッドの様な物が作られるようになった。

1 シュメール人の都市国家



③ウルのジググラト（現イラクのメソポタミアの南部）には、中央部に高層のジググラト（聖堂）がつけられた。ウルのウル・ナムム王は、日干しれんがの 3 層の基壇上に、月の神をまつた神殿を建設した。

④ウルのスタンダードウルの王墓から出土した木製の板で、戦争と平和の 2 面がある。写真は戦争の面。戦車、騎兵の姿を表現した貴重な歴史資料となっている。左下は「ろば」にひかせたシュメールの戦車。

現在に残るシュメール人の発明

- ・七曜制（1 週間 7 日制）
- ・占星術（星占）
- ・60 進法（1 時間 60 分、円周 360 度）
- ・太陽太陽暦

シュメール諸都市国家では、ティグリス・ユーフラテス川が氾濫する時期を知るため、暦法などが発達した。

P.4 **シュメール人は1文字、②言語、③医学、④天文学、⑤数学、⑥宗教、7戦術、8呪、9魔術、⑩神話などの分野を始めて産み出した**ことで有名です。 “創造”と“大洪水”に関しても初めてシュメール文化でみることができる。

紀元前 3000 年頃には、都市や町が 35 程あり、その内キシュ、ニップル、ザバラム、ウンマ、ラガシュ、ウルク、ウルなど 18 の大都市があった。大きな都市は通常城壁が巡らされており、それぞれの都市に独自の神が存在し、最低一つの高い神殿ジグuratがあった。シュメール末期にはシュメール人の主神がアヌからエンリルに代わっており、エンリルの神殿がニップルにあったことから、ニップルがシュメール人の宗教におけるの首都と見なされている。

紀元前 2400～2350 年の間、シュメール人は衰退し、**アッカド人が増加しました**。そして、**サルゴン王**が率いる**アッカド王国**に征服された。

✓ シュメール文明発祥の主なもの

①**60 進法**：楔形文字には 1 から 59 に対応する数字（シュメール人が数字を発明した）があった。

アラビア数字（1～9）は、2000 年前にインド人が考案し、世界中に広まった。

インドでは、紀元前にすでにアラビア数字（1～9）が使われ、「0（ゼロ）」は 7 世紀初め頃に誕生し、世界中に広まった。

また、**そろばん**の始まりも、約 4000 年前にメソポタミア地方で生まれた“**砂そろばん**”といわれている。これは砂の上に線を引き、小石を並べて計算するものだった。それを中国では小石を木にかえて串刺しにした。日本では、そろばんは室町時代（1336 年～1573 年）の末頃に長崎や大阪・堺の港に入ってきたと言われている。最初に伝来したそろばんは、五珠が 2 個、一珠が 5 個の中国式そろばん、日本のそろばんは、それを改良してできた。

②**天文学**：月 30 日、年 360 日とする太陰暦を使っていた。

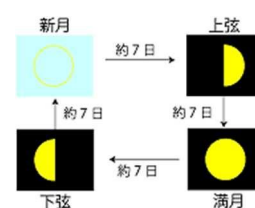
③**七曜制**：月の満ち欠けの 7 日ごとの変化から 1 週という単位を生み出した。

④**青銅器**

⑤**ビール**：紀元前 3000 年頃の最古の記録「**モニュマン・ブルー**」に製造法が楔形文字で記されている。

⑥**法典**：表記されたものとして最古で、シュメールは最古の法治国家である。

⑦**王名表**



【参考】モニュマン・ブルー

モニュマン・ブルー（仏語：Monument bleu）と呼ばれる粘土版（石板）で、1935 年、アメリカのペンシルバニア大学の考古学調査隊が今のイラクにあるシャルモ遺跡で発見した。青みを帯びた小さな石板で、そこに刻まれている楔形文字を解読したところ、ビールを造っている様子を記録したものであることが判明、描かれているのはビールを醸造している人物である。青みがかったその色に因んでモニュマン・ブルーと呼ばれ、以来、ビール醸造の最古の記録とされ、大英博物館かルーブル美術館のどちらかに所蔵されている。そこには、農耕の神ニンハラに捧げるビールづくりの様子が楔形文字で刻まれ、中央には杵を使って麦の皮むきをしている人物が描かれている。穀物を原料とするパンとビールは、シュメール人にとって神聖にして毎日を生き抜く栄養の糧であった。



【参考】世界で最初の王の名を記した「シュメール王名表」

初めて王名表にて**代々の王朝の王を記した**のもシュメールです。王名表には、実在の王の他に、洪水の前に住んでいた地域には 8 人の伝説的な支配者など神話的要素も含まれていた。王の名が連なった中で唯一の女王は、キシュ第 3 王朝の一代限りの君主であった「ク・バウ」のみで、娼婦から王妃、そしてキシュの女王に上り詰め 100 年間在位したと言う伝説的な女王である。なお、考古学上確認された最古の王は、紀元前 2800 年頃に在位したキシュ王「エンメバラゲシ」である。

P.5 【参考】メソポタミアで生まれた最古の文学作品「ギルガメシュ叙事詩」

ギルガメシュ叙事詩は、シュメール初期王朝時代に実在したとされる伝説的な王ギルガメシュに関する諸伝承が書かれた史上最古で古代オリエン特最大の文学作品です。現在に残る最古の写本は紀元前 1800 年頃に古バビロニア語で書かれたものです。紀元前 1300～1200 年頃には標準バビロニア語で叙事詩として編集された標準版が、12 枚の書版に書かれていた。これの最も状態の良い写本が紀元前 7 世紀のアッシュルバニパルの図書館の遺跡から見つかっている。ギルガメシュ叙事詩は各言語に翻訳されて各地に広まっていた。前二千年紀後半のバビロニア語版がヒッタイトやシリア・パレスティナで、他にもヒッタイト語版やフルリ語版も発見されている。

▶メソポタミアを最初に統一した<アッカド王国>：紀元前 2334～紀元前 2154 年

アッカド人は、南メソポタミアのシュメールが栄えた地域より少し北の地に紀元前 2500 年頃移住し、シュメール文化を取り入れながら力をつけ、シュメールの後に 180 年間メソポタミアの主権を握り、<アッカド王国>を作り上げた。

- ・年代：紀元前 2334～紀元前 2154 年頃
- ・民族：紀元前 2500 年頃にメソポタミアに移住してきたセム系民族。
- ・言語：アッカド語。

アッカド語は、世界最古のセム語であり、シュメール語から続く楔形文字を使用していました。

シュメール語は徐々にアッカド語に置き換わり、アッカド語は以降の古代オリエン特の国際共通語になっていく。公的文書ではアッカド語が使われたが、口語的な文学や科学などでは 1 世紀までシュメール語が使われ続けた。

- ・首都：アッカド（ユーフラテス川とチグリス川が最も近くなっている場所で、正確な位置は不明）

シュメールのキシム第 4 王朝のウル・ザババ王の笏持ちであったアッカド人のサルゴンが王となり、シュメールを征服し、南メソポタミアを掌握して<アッカド王国>を作った。そして、東のエラム人と主従協定を結び、東の安全を確保した後、西方遠征にて北はトロス山脈、西は地中海沿岸及びキプロス、南はペルシャ湾まで領土を広げ、史上初めて中央集権的な国家を築いた。

アッカドは北の天水農業と南の灌漑農業の二つの農業により高い農業生産力を持つことで、経済と人口増加を可能にし、軍事力を担っていた。しかし、アッカドの地では金属鉱石や石材や木材が不足していたため、アナトリア半島から銀、現在のアフガニスタン方面からラピスラズリ、レバノンからレバノン杉、マガン(現オマーンの一都市)から銅などを輸入する為に広範囲にわたり多くの国際貿易を行っていた。サルゴンの後、二人の息子たちが順に王位に着き、その後孫のナラム・シンが第 3 代目の王となり、南のシュメールへ、東のエラムへ、北のアナトリアへ遠征を行ない、祖父サルゴンの領土を守りながら拡大に努めた。アナトリアではハッティの王パンパを筆頭にパルシュハンダ、カルシャウラ、カニシュなど 17 諸国からなる軍隊と戦ったと記録されている。その後、ナラム・シンの息子のシャル・カリ・シャリが王になった頃には、周辺民族の反乱に遭い、最終的には北のザグロス山脈から侵略してきたグティ人により、紀元前 2154 年に<アッカド王国>は滅亡した。

▶再度シュメールが再興した<ウル第 3 王朝>：紀元前 2154～紀元前 2004 年頃

その後、アッカドの地をグティ人が約 125 年間支配し無政府状態となります。そして紀元前 2060 年頃にウル王ウル・ナンムにより再度シュメールが再興され、<ウル第 3 王朝>を築き、ウル・ナンム王以下 5 代に渡り 100 年ほど最も栄えた時代が築かれました。

しかし、紀元前 2004 年頃に東からエラム人が侵攻して最後の王イビ・シン王をエラムに連れ去ったことにより、この王朝は滅亡。<ウル第 3 王朝>の滅亡と共にシュメールは消滅し、歴史の舞台から消えた。

P.6 ▶メソポタミア文明の最盛期→<1>古バビロニア時代・<2>中期バビロニア時代

古・中期バビロニアは、現バクダッドからペルシャ湾までの南メソポタミア(シュメールとアッカドの土地)を支配したアムル人の王国です。

- ・年代：古バビロニア時代…紀元前 2004～紀元前 1595 年
中期バビロニア時代…紀元前 1595～紀元前 625 年

・民族：アムル人。

元はメソポタミア西部のシリア方面の遊牧民で、ウル第 3 王朝末期頃に南メソポタミアに移住してきた民族。

- ・言語：北西セム語系のアムル語
- ・首都：バビロン

<1>古バビロニア時代：紀元前 2004～紀元前 1595 年

前期が紀元前 2004～1750 年頃の群雄割拠の「イシン・ラルサ時代」、後期が紀元前 1750～1595 年のハンムラビが統一した「バビロン統一王朝時代」の二区分に分けられる。

ウル第 3 王朝滅亡後、「イシン・ラルサ時代」には、アムル系のイシン、ラルサ、バビロン、マリ等の諸王朝が乱立し、覇権争いが行われていた。その中でも力を持ったイシンが<イシン第一王朝>を築き勢力を振るった。その後、ウルとニップルの町を巡り、力を付けたラルサと対立し争いますが、ラルサがイシンに勝利して強力国になった。

紀元前 1894 年頃から勢力を付けて来たバビロンで、<バビロン第一王朝>が成立する。この頃一都市国家に過ぎなかったバビロンだったが、紀元前 1792 年に第 6 代目王に即位したハンムラビは、北の上メソポタミアを支配していたアッシリアのシャムシ・アダド 1 世と同盟を結び、紀元前 1759 年頃迄には周辺諸国イシン、ウルク、ウルなどを攻略、紀元前 1763 年頃に南の下メソポタミアを征服し、その後アッシリアをも支配下に置き、全メソポタミアを統一しました。ハンムラビの死後、息子のサムス・イルナが王位に着くが、治世中に支配下の国々の反乱が続き、バビロニアは多くの領土を失う。また、紀元前 1741 年にザグロス山脈からカッシート人が侵入し、やがてバビロニアは弱体化、紀元前 1595 年にヒッタイトのムルシリ 2 世により滅亡された。

<2>中期バビロニア時代：紀元前 1595～紀元前 625 年

紀元前 1500 年頃にカッシート人がバビロンを占領してバビロニア全域を支配、バビロン第 3 王朝とも言われる<カッシート朝バビロニア>を建国する。この頃、北部のアッシリアはフルル人のミタンニ王国に従属させられていた状態だった。1400 年代にはバビロニア、ヒッタイト、ミタンニ、アッシリア、新エジプト王国がオリエントの覇権を掛けて争い、ミタンニが滅亡すると、アッシリアが勢力を盛り返す。その後、アッシリアと東のエラム人の攻撃が相次いだため、バビロニアは弱体化し、紀元前 1155 年にエラム

人によりバビロンが攻略されカッシート朝バビロニアも滅亡する。この際に、エラム人はバビロンからハンムラビ法典をスーサ(現イラン)へ持ち去ったため、ハンムラビ法典は後世バビロンではなくスーサの遺跡から出土している。カッシート朝滅亡後すぐの紀元前 1157 年に、バビロン第 4 王朝とも呼ばれる<イシン第 2 王朝>が勃興しバビロンを首都としたが、紀元前 1026 年ごろに滅亡し、続いて短命の王朝が幾つも興亡します。

その後、バビロニアは紀元前 625 年までアッシリア帝国の領土となり、その支配下の中でアッシリア王達がバビロンの王に即位したり、反乱や短期独立したりが繰り返されました。この期間の王朝を<バビロン第 9 王朝>、<バビロン第 10 王朝>と呼んでいる。



P.7 ▶小国からオリエン特覇者に！帝国を築いた<アッシリア>

<アッシリア>は、紀元前 3000 年頃から北メソポタミアのアッシュル付近で興った民族集団で、その後都市国家を作り諸国家の影響下にありながらも、国際遠距離貿易に力を入れながら独自に存在感を見せた小国だった。興亡の激しいオリエン特世界で国家体制を維持しながら勢力を増したアッシリアは、紀元前 800 年代に遂には世界で最初にオリエン特を統一し、大帝国を成し遂げた。

- ・年代：初期アッシリア…紀元前 3000～紀元前 2000 年頃
古アッシリア時代…紀元前 2025～紀元前 1522 年
中期アッシリア時代…紀元前 1397～紀元前 1056 年
(青銅器時代の終焉…紀元前 1055～紀元前 936 年)
新アッシリア時代…紀元前 911～紀元前 609 年

・民族：アッシリア人。

元々はセム系民族ですが、時がたつにつれフリ人も混ざったとされています。

・言語：アッシリア語。セム語系アッカド語の北方方言。

・首都：アッシュル、ニノヴァ

アッシリアは、紀元前 3000 年頃よりメソポタミアの中央、チグリス川の西河畔、現イラク北部のアッシュル及び周辺に住んでいたセム系の民族です。元々はアラビア半島から来たセム系とも言われている。

紀元前 2000 年頃のウル第 3 王朝が滅亡した頃に漸く歴史に出てくるようになった。



<1>古アッシリア時代：紀元前 2025～紀元前 1522 年

アッシリアは肥沃な三日月地帯の中央部にあり、メソポタミアとアナトリア半島、シリア、イラン高原といったオリエン特各地を結ぶ交易の中継地であったため、アッシリア商人は各地にカルムと言う商人居留地を設置して、国際貿易網を築き、富を得た。まずは、南メソポタミアとの商業を確立し、青銅の原料となるイラン高原の錫の交易を独占して中継貿易で栄えた。紀元前 1960 年以降、特にアナトリアに多くの商人居留地を築いたが、その中心となるのが中央アナトリアのカイセリの北約 20 kmにあるカニシュ(現キュルテペ)で、中央貿易センターの役割を負い、ここで関税がかけられた後にアッシリア商人はアナトリア各地と貿易を行っていた。

このアッシリア商人のおかげで、アナトリアに文字がもたらされ、地方支配者の都市が発展して人口増加するようになった。当時としては信じられない程高度な商業が確立されており、カニシュからはこのアッシリア商人居留地時代の商業契約や記録の粘土板タブレットが数多く見つかっている。

アッシリアは、シャムシ・アダド 1 世の治世紀元前 1813～1781 年には、北メソポタミア一体を征服してオリエン特最大の国になり、南のバビロニアのハンムラビ王もこの治世はアッシリアに従臣していた。その後、バビロン第 1 王朝の覇権下に入ったり、紀元前 1450～1393 年にはミタンニ王国に従属し、エリバ・アダド 1 世がミタンニを破り独立国家となったことで古アッシリア時代が終わった。

<2>中期アッシリア時代：紀元前 1397～紀元前 1056 年

独立を取り戻したアッシリアは、ユーフラテス川まで領土を広げ、その後徐々にメソポタミア、アナトリアの南東、シリアの北方で大きな権力を獲得し、バビロニアをも征服した。しかし、紀元前 1208 年トゥクルティ・ニヌルタ 1 世の死去により、国は衰退期に入った。紀元前 11 世紀のティグラト・ピレサー 1 世の治世中に短期間元の権力を取り戻したが、その後アラム人の侵攻により混乱期に入って行った。

<3>新アッシリア時代：紀元前 911～紀元前 609 年

紀元前 9 世紀にアッシリアの王たちは領土を再度広げ始めた。紀元前 8 世紀後半から紀元前 7 世紀末にかけてティグラト・ピレセル 3 世やサルゴン 2 世やセンナケリブの様な強力な王の指導の下でペルシ

P.8 ヤ湾からエジプトまで広範囲の土地を支配下として獲得し、紀元前671年に全オリエントを史上初めて統一した。そしてティグラト・ピレセル3世の治世からアッシュルバニパルの治世までの100年あまり、新アッシリア帝国として現在まで名の知れ渡った大帝国を建国した。しかし、アッシュルバニパル治世後半からこうした巨大帝国も帝国内の反乱や、国外からの侵入により急激に衰退し、アッシュルバニパルがエラムを滅亡させたものの、立て直すことはできず、紀元前612年に新バビロニアとメディア連合軍の攻撃を受けて首都ニネヴェが陥落、紀元前609年にアッシリアは滅亡した。

【参考】アッシリア人

現在も、アッシリア人(アラム人またはカルデア人とも言われる)は、中東固有の少数民族の一つとして存在しています。現代のアッシリア人は、古代メソポタミアの紀元前2500年にまでさかのぼる世界で最も古い文明の1つであるアッシリア人の子孫であると主張するシリアのキリスト教徒の少数民族です。

現在彼らのほとんどがネストリウス派のアッシリア東方教会、カルデア教会、シリア正教会のキリスト教信者である。メソポタミアの住民であった古代アッシリア人は、古代民族の中でも最初の西暦1~3世紀頃にキリスト教を受容し、アラビア人やモンゴル人やトルコ人などから脅威に遭いながら現在まで生きながらえてきた。しかしながら、本当のところ古代アッシリア人と現アッシリア人の遺伝的關係は未だ解っておりません。アラム人が起源の民族と言う説もあります。ただどちらにしろ、古代メソポタミアを祖先に持つ民族であることは変わらない。

現在のアッシリア人は世界各国に広まっているが、主に古代アッシリアとほぼ同じ地域の現在のイラク北部(ニネヴェ平原とドフク県)、トルコ南東部(ハッカーリやトゥルアブディンやマルディン等)、イラン北西部(ウルミア)、そして最近ではシリア北東部(アル・ハサカ県の一部)に住んでいる。なお、彼らは、居住国の主要言語だけでなく、セム語派の現代アラム語を話す。

▶古代メソポタミア最後の帝国 <新バビロニア> : 紀元前626~539年

<新バビロニア>は、アケメネス朝ペルシアに征服されるまで100年程帝国として君臨した短期政権です。カルデア人が建国した国でもあったので、**カルデア王朝**とも呼ばれています。短期ではありますが、バビロニアが史上最大の栄華を誇った時代でもありました。

- ・年代：紀元前626~539年
- ・民族：セム系アラム人、カルデア人
- ・言語：セム語系アッカド語バビロニア方言
- ・首都：バビロン

アッシリア支配下バビロニア南部総督であったカルデア人のナボポラッサル(在位：紀元前625年~紀元前605年)は、紀元前625年に反乱を起こしてバビロニアをアッシリアから独立させて、紀元前625年にバビロニア王に即位した。そして、メディア国と同盟を結び紀元前616年には全バビロニアを支配し、息子のネブガドネザル2世の治世に最盛期を迎えた。彼はシリアやパレスチナ方面に多く遠征し、エジプト王ネコ2世をカルケミシュの戦いで破ってエジプト国境までの地域を支配した。

紀元前597年にイスラエルのユダ王国の首都エルサレムを陥落し、紀元前586年まで数回にわたりユダヤ人を反乱防止、職人確保、労働力確保を目的としてバビロンに強制連行捕囚した(バビロン捕囚)。後の王たちの治世は暗殺やクーデターにより政治不安に陥り、紀元前539年に当時急激に勢力をつけていたアケメネス朝ペルシアのキュロス王により、バビロンが無血開城され、新バビロニアは滅亡した。

P.9 【参考】世界七不思議の一つ バビロンの空中庭園

世界七不思議の一つとされている“バビロンの空中庭園”は、古代のバビロニア(イラクのバービル県ヒッラ付近)にあったとされている。新バビロニア2代目の王ネブカドネツアル王が、メディア出身の妻アムティスが故郷の山々や山岳が恋しくなったとの事でザグロス山脈に模して造らせた宮庭です。山の様な庭園は段々になっており、灌漑水路システムが張り巡らされていて、各テラスには緑いっぱいの庭園があったとされ、空中にある庭園のようだった(未だ考古学的発見がされていないため、位置も明確になっておらず、正に不思議で謎の多い庭園である)。この庭園はバビロンではなく、アッシリアの首都ニネヴェに6世紀にアッシリア王センナケレブによって作られた庭園ではないかという説もある。

【参考】バベルの塔

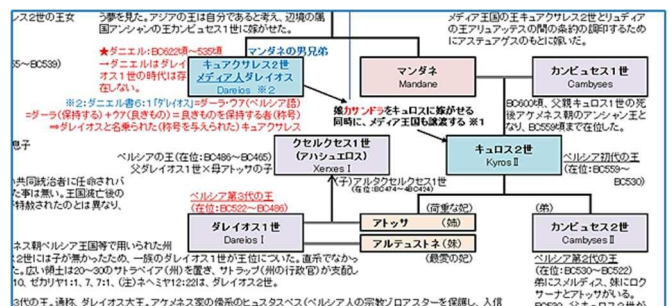
旧約聖書やコーラン(イスラム教の聖典、クルアーン)に記されているバベルの塔は、神に近づくために造った塔で、バビロンの巨大ジググラト(古代メソポタミアにおいて、日乾煉瓦を用い数階層に組み上げて建てられた巨大な聖塔で、「高い所」を意味する)がモチーフになったとされる。古代シュメールやバビロニアでは、天と地を繋ぐ聖なる木の信仰があり、その聖なる木を現した、また神々の山とも呼ばれている“ジググラト”と言う神殿が建設されていました。バビロンのマルドゥク神殿の中心部に築かれたシュメール語で「天と地の基礎となる建物」を意味する“エ・テメン・アン・キ”と言うジググラトが伝説の「バベルの塔」だと言われている。幅90m、奥行き90m、高さ90mの七階建て、バビロン神話に登場するバビロンの都市神でバビロニアの国家神であるマルドゥク神のために造ったのがジググラトだった。また、ジググラトの周りには僧侶の宮殿や倉庫や客室が作られていた。バビロンを侵略したトゥクルティ・ニヌルタ、サルゴン、センナケレブ、アッシュルバニパル等のアッシリアの王達により塔は破壊されるが、新バビロニアの王ナボポラッサルとネブカドネツアル王によって再建された。しかし、紀元前479年にバビロンを征服したペルシアのキュロス王によって塔は破壊され、その後再建されることはなかった。後に、アレキサンダー(アレクサンドロス)大王がバビロンにやって来た際に廃墟の状態の塔を称賛し、元の状態に戻すことにし、1万人を動員して2か月間瓦礫を撤去させたが、大王の死と共に再建工事は断念された。

▶世界帝国を打ち立てたアケメネス朝 <ペルシア> : 紀元前550~330年

アケメネス朝ペルシアは、ペルシア人が建てた最初の世界帝国です。

- ・年代：紀元前550~330年
- ・民族：イラン系民族のペルシャ人
- ・言語：インド・ヨーロッパ語系
- ・首都：パサルガダエ、スーサ、ペルセポリス、エクバタナ

紀元前5世紀前期ペルシアはまだメディアの属国の小国だった。ペルシア初代王、**キュロス2世**は、紀元前552年に母方祖父が統治するメディア王国に反旗を翻してメディアを滅ぼした。後、“不死隊”と呼ばれる精鋭部隊を率いて紀元前547年にアナトリア西部のリディア、紀元前540年にはエラム王国を征服、紀元前539年にはバビロンを無血開城させ、新バビロニアを滅ぼし、東方ではソグディアナとバクトリアを征服した。また、西はアナトリアから東はヤクサルテス(シルダリア)川までを支配する大帝国を建国した。後継者のカンビュセス2世は、紀元前525年にエジプト第26王朝を支配下に置き、オリエントを統一した。その後、アケメネス朝ペルシアは、東はガンダーラまで征服し、西はギリシア占領のためにペルシア戦争を起こし、領土拡大を目指すも、紀元前330年にマケドニア軍率いる**アレキサンダー(アレクサンドロス)大王**により220年続いたアケメネス朝は滅ぼされた。アレキサンダー大王死後は、ディアドゴイ戦争の末に、アレキサンダー大王の将軍であった**セレウコス**が受け継いだ**セ**



P.10 レウコス朝シリアが統治、ヘレニズム文化（アレキサンダー大王の東方遠征によって生じた古代オリエンとギリシアの文化が融合した「ギリシア風」の文化）の一部となりました。

▶その後のメソポタミアの主な歴史

紀元前 141 年 アルサケス朝パルティアが征服。

116～118 年にトラヤヌス率いるローマ帝国軍が占領するがすぐに撤退。再度パルティアのものとなる。

230 年 ササーン朝ペルシアの領土となる。

634 年 アラブ軍の支配下に入る。

北はモースルを、南はバグダッドを首都とした二つの州に分かれ、その後バグダッドはイスラム国家の首都となる。その後アッバース朝（アッバース家のカリフ支配が続いたイスラーム帝国）が支配。

1258 年 モンゴル帝国の地方政権イルハン朝の領土となる。

1508～1534 年 短期間、サファヴィー朝の支配下となる。

1534 年 オスマン帝国のスレイマン大帝が征服。

これによりメソポタミアはモースル、バグダッド、バスラの3つの州に分割。

1920 年 第一次世界大戦後にイギリス委任統治領メソポタミアが成立。

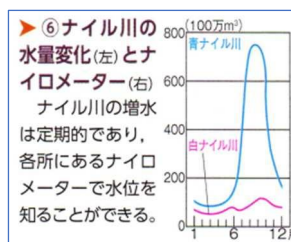
1932 年 イラクが独立したと共に、メソポタミアのほとんどがイラクの領土となる。

▶メソポタミア文明が滅亡した原因とは？

シュメール文明およびアッカド帝国滅亡の要因の一つは、気候変動だと言われている。紀元前 2,000 年頃のメソポタミア地域は、冬の雨季が非常に乾燥・寒冷化した。降水量が減少し土壌中の塩分濃度が高くなった中で、シュメール人は木材調達のために次々と森林を伐採したため、乾燥によって塩分が高くなった土壌が流出し塩害が進行、灌漑のための水路がダメとなり、農業がダメージを受けて食糧不足が起こったことが、文明の衰退の原因になったと見られている。

また、歴史的に見れば、この地域で最大の栄華を誇った新バビロニア帝国の滅亡が、メソポタミア文明の一つの終焉と考えられる。その後、アケメネス朝ペルシアは、メソポタミア文明を継承してオリエン文明を开花させたが、アレキサンダー大王の東方遠征によってペルシア帝国も滅亡、オリエン文明がギリシア文明と融合してヘレニズム文化が生まれ、アラビア半島から入ってきたイスラム教が西アジアに普及していくなど、メソポタミア文明は歴史に埋もれていった。

▶その他 [メソポタミア神話の主な神々](#)



参考：ターキッシュエア&トラベル トルコ基本観光情報
出典：最新世界史図説 タペストリー 十三訂版 帝国書院 他

P.11 【参考】古代文明発祥の地 メソポタミアの変遷(ハラフ文化からペルシアまで)

- ▶土器・陶器が発達した北メソポタミアの<ハラフ文化>：紀元前 6,000～紀元前 5,400 年頃
- ▶新石器時代の南メソポタミア最古の<ウバイド文化>：紀元前 5900～4300 年頃
- ▶集落から都市国家へ <ウルク文化>：紀元前 4000～3100 年頃
- ▶最古の都市文明 メソポタミア文明を築いた<シュメール人>：紀元前 4000～2334 年頃
- ▶メソポタミアを最初に統一した<アッカド王国>：紀元前 2334～紀元前 2154 年
- ▶再度シュメールが再興した<ウル第3王朝>：紀元前 2154～紀元前 2004 年頃
- ▶メソポタミア文明の最盛期
 - 古バビロニア時代：紀元前 2004～紀元前 1595 年
 - 中期バビロニア時代：紀元前 1595～紀元前 625 年
- ▶小国からオリエント覇者に！帝国を築いた<アッシリア>
 - 初期アッシリア時代：紀元前 3000～紀元前 2000 年頃
 - 古アッシリア時代：紀元前 2025～紀元前 1522 年
 - 中期アッシリア時代：紀元前 1397～紀元前 1056 年
 - 青銅器時代の終焉：紀元前 1055～紀元前 936 年
 - 新アッシリア時代：紀元前 911～紀元前 609 年
- ▶古代メソポタミア最後の帝国 <新バビロニア>：紀元前 626～539 年
- ▶世界帝国を打ち立てたアケメネス朝 <ペルシア>：紀元前 550～330 年

2020.01.17